

2022 年度私立大学図書館協会海外派遣研修  
イリノイ大学モートンソンセンター・アソシエイツプログラム 参加報告書

2022 年 10 月 6 日  
慶應義塾大学 日吉メディアセンター  
長坂 功

## 本報告書の構成

1. はじめに
2. 研修参加動機と目的
3. プログラム概要
4. イリノイ大学・イリノイ大学図書館
5. プログラム内容について
6. おわりに

### 1. はじめに

2022年5月25日～6月21日<sup>1)</sup>の約1か月間、米国のイリノイ州アーバナ・シャンペーン市にあるイリノイ大学モーテンソンセンター（以下、センター）で、図書館員のための国際図書館研修プログラム<sup>2)</sup>に参加する機会を得た。本研修は私立大学図書館協会とセンターとの協定により、私立大学図書館協会加盟館の図書館職員が参加できるものである<sup>3)</sup>。参加希望者はこの協会の国際図書館協力委員会とセンターの選考を経た後にアソシエイトのメンバー（以下、研修参加者）として参加できる。

私は2020年度に参加予定であったが、2020年に新型コロナウイルスがパンデミックとなって猛威を振るいだし、その後もコロナ禍で本研修の開催が2年間中止されたため、今回の参加となった。参加国は、日本・韓国・南アフリカ(各2名)、パキスタン・オマーン・カタール・ガーナ(各1名)の合計7か国、10名だった。今回の参加者の約半数は私と同じく延期参加組であったが、2022年のプログラムへは参加募集が行われており、残りの半数が新規組である。このような事情があり、私立大学図書館協会からは法政大学図書館の有川博隆氏と私の2名が参加することとなった。

コロナ禍もあって外国からの米国への入国事情は国によって制限のレベルが異なるため、ビザの取得ができず、直前になって参加できなくなった方もいた。またウクライナ戦争の影響でヨーロッパ経由の航空便事情が悪化しており、海外渡航そのものが厳しいケースもあったと思われる。このような状況の下、図書館員のための海外研修プログラムが開催されたこと、それに向けて参加準備にあたった関係各位の理解と努力があったことを最初に記しておく。

### 2. 研修参加動機と目的

研修への参加動機は主に2つあり、ひとつは、テクノロジーやビジネスモデルの変化による影響をいち早く経験している北米の大学図書館のトレンドを知り、日本との比較を通じて、今後の図書館サービスのあり方についての知見や見通しを得たいと考えていたからである。

例えば、私立大学図書館協会がこの研修へ派遣したこれまでの参加者の報告書にはMaker Spaceについて言及している報告がいくつかあった。私自身は慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス(以下、SFC)に勤務していた時に、大学図書館内のMaker Spaceの運営に関わっていたため、Maker Spaceの図書館内での立ち位置を米国の視点で捉えることができないかに関心を持っていた。Maker Spaceは米国以外でも北欧の図書館では広く受け入れられていることもあり、日本ではどうして普及しないのか疑問を持っていた。図書館サービスの一つとして、Maker Spaceを深く知ることは目的の一つであった。

また、私が勤務する慶應義塾大学メディアセンターでは海外製図書館システムであるAlma/Primo VEを2019年から大学間のパートナーシップにより、早稲田大学図書館と共同運用している。このため、Library Service Platform(以下、LSP)と表現される図書館システムの米国での実際や、大学図書館間協力の一面であるコンソーシアム状況について現地で確認してみたい、という思いもあった。コンソーシアムの働きも米

国と日本では違いがあり、米国では Partnership、Alliance、Consortium、Cooperation など様々な名称で図書館間協力が行われており、この差はどこから来るのか知りたい、という目的もあった。

参加動機のもうひとつは、海外からの多数の参加者を受け入れるプログラムに身を置くことで米国社会の多様性を実際に体験できると思ったからである。海外の図書館員と意見交換したいという目的も持っていた。公私にわたって直接交流する機会を得ることで、新たな刺激を受け、図書館員としての考え方、業務への視点を見つめ直すことに繋がると考えた。過去の参加者による報告書からもここでしか得られない経験はとて価値があるものだと感じていた。

### 3. プログラム概要

センターはモーテンソン夫妻の寄付によりイリノイ大学図書館内に 1986 年に創設され、1991 年以降は活動の一つとして、アソシエイツ・プログラムという名称で米国以外の世界中の図書館員を対象とした非学位の研修プログラムをほぼ毎年開催している。これまで世界各国から 1,300 名以上がこのプログラムに参加しており、発展途上国と位置づけられる国からの参加者が多く、私が参加した回もアフリカ、中近東からの参加者が半数以上であった。日本からの参加者は毎年若干名あり、参加報告書は私立大学図書館協会のホームページ等で公開されている<sup>3)</sup>。

センターの事務室や講義ルームはイリノイ大学の学部図書館内の一角に位置していたが、学部図書館は全面的に大学アーカイブとスペシャルコレクションの図書館となるべく、2024 年に向けての工事が開始されていたため、研修期間中は休館している状態であった（センターはその後 2022 年 8 月にメインライブラリー内へ移転）。センター長は教授職の Clara M. Chu 氏、サポートのスタッフ 2 名はすでに定年を過ぎた元センター長の Barbara Ford 氏と図書館情報学系の教員であった Amani Ayad 氏であった。リタイヤ後もなお、国際間の交流事業に身を置く姿は、米国ライブラリアンのプライドとホスピタリティを感じさせる。Barbara Ford 氏は ALA の代表職も務めた経歴を持っており、米国図書館界ではよく知られた人物であり、その人脈もプログラムに大きく寄与していると実感した。プログラムの一環で研修参加者とともに訪れた先では前もって参加者に訪問先の情報を教えてくれたり、訪問先のスタッフと研修参加者の間をとりなす役割をしてくれていた。今回の研修期間中もほとんどの時間を参加者と一緒に過ごしていた。

センターのミッションは「国際的な教育、理解、平和を促進するために、世界中の図書館と司書との国際的なつながりを強化すること」<sup>4)</sup>とあり、その具体的活動を担うのは相応のキャリアを持った人物でなければ難しいであろう。センターの活動は幅広いが、このプログラムについては、北米の最新の図書館事情を参加者に教えるとともに、米国流のライブラリアンシップを米国以外の図書館員に対して教育し、国際間の図書館協力の発展につなげることである。

本プログラムは講義、リーダーシップ研修、ワークショップ・交流・発表、図書館等の見学訪問で構成されており、参加者はセンターが決めたスケジュールをこなしていくスタイルである。これは海外研修先において自身で目標や課題、スケジュールを設定するものとは異なる。プログラムは全て英語で行われ、参加者には自ら進んで発言するような積極的姿勢と、センターのスタッフや講義のプレゼンター、あるいは他の研修参加者との協調性が求められる。また、英語でコミュニケーションをとることも当然必要である。そしてプログラムの課題に対してお互いが同僚として取り組み、問題意識を共有し、解決策を一緒に考えていくことが重要である。研修のプレゼンターは外部団体や企業の派遣講師が行うこともあったが、イリノイ大学の教員・図書館員が担うことが多かったため、北米の図書館事情を反映するものではあるが、結果的に講義での紹介事例はイリノイ大学図書館のケースとなることが多かった。

#### 4. イリノイ大学・イリノイ大学図書館

図書館員向けの研修は数あれども、このようなプログラムが用意されている場合は世界中どこにもなく、大変ユニークなものである。本プログラムを提供しているセンターが設立されているイリノイ大学・イリノイ大学図書館について整理する。

イリノイ大学は18の学部、学生約55,000名<sup>5)</sup>、教職員約8,000名<sup>6)</sup>を擁する総合大学で、その図書館は1,300万以上の蔵書を持つ、全米でも最大規模の大学図書館の一つである。年間の資料購入予算は2,100万ドル(1ドル135円換算で約28億円)である。日本との大きな違いの一つは図書館員のステータスである。米国の大学図書館の特徴でもあるが、図書館員として所属しつつも教員資格を持ったライブラリアンがおり、イリノイ大学図書館では約90名が専門部署に配属されている。

また、イリノイ大学には(図書館)情報学大学院と呼ばれることもある、全米No.1の評価<sup>7)</sup>を持つiSchool<sup>8)</sup>があり、いわゆる図書館・情報学系のコースがある。iSchoolの校舎見学の際、そこで学ぶ大学院生とのディスカッションもあり、かつてのライブラリースクール(Graduate Library School)が形を変えて存続している姿を知った。ただし年間のコストは授業料だけで25,000ドル以上とアメリカの学費の高騰は凄まじい。アーバナ・シャンペーン校のような大学都市なら、通学は現実的でなく、学生によってはレジデンス費用と生活費がさらに加わる。このことについてイリノイ大の関係者はよく理解しており、学生の図書購入費を減らすために電子ブックやeText<sup>9)</sup>という名称のWebインターフェースを、図書館やイノベーションセンター<sup>10)</sup>と呼ばれるサポート部署が用意することや、OER(Open Educational Resources)の整備とともに、民間出版社でなく、大学出版社をより活用して学術情報の流れを大学側に取り戻すためのプロジェクトを行っていることも後の講義で言及があった。



図1. 2. 3. イリノイ大学メインライブラリー

アメリカの学費の高騰については1980年以来、40年でなんと1,000%以上にもなっているという統計がある。イリノイ大学図書館のSara Benson氏が講義でこのことを説明した際、にわかには信じがたかったが、米国労働統計局の統計値<sup>11)</sup>でもこのことが確認できるため、この学費の上昇にはアメリカ固有の事情があるようだった。帰国後にこの背景を調べたところ、奨学金の融資保証をアメリカ政府が金融機関にしているため、学生が貸付奨学金を容易に受け取れるといったことや大学間の激しい競争事情により、大学側が設備投資や人材確保のために学費を上げ続けたといったことが要因のようだった。アメリカの大学の様々な取り組みに先進性があることには疑いの余地はないが、そこには潤沢な資金の寄与もあったはずである。資金調達手段としてアメリカでは寄付が大きな役割を果たしていることは知っていたが、それに加えて、学費規模そのものが財源として大きいということもあるだろう。図書館の業務やシステム、サービスもアメリカの事例を世界標準と考えてきた一面も日本国内にはあると思う。一方で、学費の面からみれば、アメリカの事情の方が世界的にみてもかなり特殊な位置にあるのではないかということも、大学に身を置く者として認識したいと思う。

イリノイ大学図書館の図書館業務システムはAlma、ディスカバリーシステムにはPrimo VEを使用しており、これは慶應義塾大学でも使用しているものであるが、クラウド型のシステムであり、LSPとして機能することが期待されているものである。利用者用の検索画面は独自開発のEASYsearch<sup>12)</sup>というダッシュボード型の統合表示インターフェースを組み合わせているのが印象的であった。これはDiscovery サービスの進化系と位置付けられるWebscale Discovery Services (WSDS)であるが、記事や電子書籍、図書、その他のWebリソースの検索結果をそれぞれのボックス内で表示させる工夫がなされていた。EASYsearchについてはイリノイ大学図書館員のシステムチームが開発を担ったことで、これまでの研修報告でも説明がなされているが、利用者用のインターフェースにこだわりを持ち、システムベンダーが提供するものに安易には依存しないとイリノイ大学図書館側のプライドを感じた。なお、Almaの業務利用においてはイリノイ大学図書館の各所でシステムが使い易いかどうか尋ねてみたところ、イリノイ大学図書館のスタッフからはAlma/Primo VEはインテリジェント型のクラウドシステムということで図書館員側の評価や期待もなかなか高いようであった。



図4. 5. イリノイ大学 iSchool でのディスカッション、案内ボード

イリノイ大学・イリノイ大学図書館におけるコンソーシアム活動についても整理しておく。アメリカの中西部にはBIG 10 Academic Alliance<sup>13)</sup>と呼ばれる巨大なコンソーシアムがあり、年間300万ドル超の予算を持つ加盟大学間の協力体制がある。イリノイ大学はこのコンソーシアムの盟主であり、大学図書館もこのコンソーシアムの下で電子資料の共同購入・契約やシェアプリントレポジトリ(外部書庫)の運営、リソースシェアリング、ILL協力はもちろん、大学所属者への閲覧や貸出のサービスなどが行われている。また、イリノイ州内のコンソーシアムCARLI(Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois)<sup>14)</sup>にも加盟しており、こちらでも電子資料の購入・契約や所蔵資料のデジタル化作業などを行っている。電子資料についてはそれぞれの出版社と交渉してより有利な条件で受け入れを決めているようであった。また、加盟館内ではI-Shareと呼ばれるディスカバリーシステムをPrimo VEによって提供しており、加盟館内のリソースの共有、ILLサービスに貢献している。研修プログラムではCARLIの代表者Anne Craig氏による講義を聞くことができ、このようなコンソーシアムが大学図書館の業務に大きく関係していることを知った。北米の大学図書館の特徴の一つであろう。

慶應義塾大学は早稲田大学とのパートナーシップ協定の下<sup>15)</sup>、図書館システムであるAlma/Primo VEを共同運用しているが、リソースの共有や相手館への利用者による直接的な資料取り寄せまでには進んでおらず、相互協力の体制やノウハウの蓄積はイリノイの事例が一步進んでいると思われる。また早慶という2校によるパートナーシップでのコンソーシアム、協力体制というのは米国でも事例があまりないのではないかとと思われる。現時点でのコンソーシアムの状況についてイリノイ大学と慶應義塾大学を整理したのが表1である。

	<b>イリノイ大学図書館</b> 	<b>慶應義塾大学メディアセンター</b> 
名称（所属学生数など）	<b>BIG10 Academic Alliance</b> (600,000 students) <b>CARLI</b> (Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois : 128 members in Illinois st.)	<b>Partnership</b> (80,000 students) 早稲田大学図書館との相互利用協定 
図書館システム(LSP)	単独運用 Exlibris Alma / Primo VE + EASYsearch	早稲田大学図書館との共同運用 Exlibris Alma / Primo VE
電子資源の購入先	単独もしくは <b>BIG10 Collection</b> 、 <b>CARLI</b>	単独もしくは <b>JUSTICE</b>
資料の相互利用	訪問利用, 貸出, ILL 相互利用のシステムは <b>Uborrow</b>	訪問利用, ILL *貸出サービスは試行運用中
外部書庫、資料購入予算	<b>Share Print Repository</b> あり \$21 million *Collections/Support（単独）	それぞれで書庫を持つ <b>\$28 million</b> *資料購入費（早慶合計）

表1. 参加コンソーシアムの比較

5. プログラム内容について

(1) 講義

イリノイ大学図書館の教員・実務担当者らによる北米の図書館事情・動向に関するもの、イリノイ大学図書館の業務に関するもの、訪問先の担当者により行われるもの、センター長による情報学に関する講義など、テーマも学術図書館が現在直面している問題を扱うなど多岐にわたっていた。講義内容は表2のとおりである。

図書館業務に関する講義
デジタル戦略
-リサーチデータサービス（研究データ管理）
-デジタルコレクション
-オープン教育資源(OER)
デジタル・スカラシップ
デザイン思考と人間中心のデザイン
アクティブ・ラーニング
ブランディング・マーケティング
ディスカバリーシステム
メイカースペース
専門能力開発
リサーチ・コモنز
スペシャルコレクション
図書館評価
図書館コンソーシアム(CARLI)
OCLCについて
人工知能（AIとマシンラーニング）
リーダーシップ研修
リーダーシップスタイル（DiSC分析）
リーダーシップトレーニング(SILL)
アクションプラン作成(+SWOT分析)

表2. 講義・リーダーシップ研修のテーマ

講義の傾向として、図書館のサービスの新たな展開について言及しているものが多かった。サービスがユーザー中心となりつつあることや、大学でのコミュニケーションがユーザー同士のあるいは教員・図書館員側とのよりオープンなコラボレーションへと変容が起きていることを踏まえているのであろう。印象に残った講義について簡潔にまとめておく。

#### [リサーチデータサービス]

イリノイ大学図書館ではすでにデジタル・ストラテジーという部局により、リサーチデータサービスが展開されている。このサービスは研究データ使用に関する相談・助言を行っているだけでなく、イリノイデータバンク<sup>16)</sup>というシステムで研究データを整理・収集・蓄積する枠組みが整備されている。それぞれの大学でサービスの名称には少しずつ違いがあるが、同様の枠組みはシカゴ大、オハイオ大の各図書館でも紹介があった。

#### [Maker Space]

イリノイ大学グレインジャー工学図書館(Grainger Engineering Library)を見学した際、Maker Spaceである the IDEA Lab の講義も興味深いものだった。テクノロジーを学ぶ最初の場が「図書館」という発想があり、the IDEA Lab が出発点となり、より高度な学びに昇華していくプロセスを描いているとのことだった。これは、SFC の Fab Campus<sup>17)</sup>とほとんど同じ発想であり、SFC のメディアセンター内の Fab Space がデジタルファブリケーションの最初の体験、入門ワークショップの場となっている。図書館と Maker Space の親和性・相性の良さというのはもっと日本でも認知されて欲しいと思った。



図6. 7. イリノイ大学 Grainger Engineering Library

#### [デジタルコレクション]

米国だけでなく、世界中でデジタルコレクションの整備は進んでいるが、HathiTrust について言及する。その歴史は比較的浅いものの、近年成長し、大学図書館で存在感を増してきているデジタルアーカイブである。イリノイ大学のメインライブラリーでは蔵書のデジタルアーカイブ化を行い、HathiTrust や Internet Archive に提供し続けている。慶應義塾大学はアジア地区から初めて、HathiTrust に正式に加盟し<sup>18)</sup> (2022年現在の加盟館総数は約210)、Google ブックスプロジェクトでデジタル化を行った蔵書約9万冊を提供している。これらは公開の許諾のとれた慶應義塾大学の刊行物や慶應義塾の創業者である福沢諭吉の著作、著作権保護期間が終了していることを確認した和装本を含む資料などである。HathiTrust の資料は英語が占める割合が約5割と高く、日本語資料は3%ほどであり、その意味では貴重な日本語文献といえる。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の図書館長の John Wilkin 氏は前職が HathiTrust の代表者であり、2012年に日本を訪れた際には慶應義塾大学にも訪問をしていただいたことがあるのだが、研修参加者とのグリーティングタイムに本学の HathiTrust への正式加盟のことを伝えたとこ、大変喜んでくださり、他のメンバーにも HathiTrust の取り組みを理解していただきたいとお話されていたのが印象的であっ

た。

## (2) リーダーシップ研修

通常の講義に加えて、参加者の自己啓発を促し、組織においてリーダーシップを発揮するためのスキルトレーニングが用意されていた。コミュニケーション分析手法の一つとして知られている DiSC<sup>19)</sup>をコンサルティング会社の派遣講師から学んだ後、SILL(Strengthening Innovative Library Leaders)<sup>20)</sup>という図書館員を対象としたセンター独自のリーダーシップカリキュラムにつなげる構成であった。これはリーダーシップ発揮に伴う本質的な要件は、一般の企業や団体組織におけるものと図書館とで何ら違いはないことを意図しているものと理解できる。

DiSC分析とは職場における個人の行動特性、パーソナリティを診断して4つのタイプに分類し、自分の特性を知った上で、他者のタイプと円滑なコミュニケーションを目指すための手法である。図書館に特化したものでなく、組織における一般的な行動特性を理解するものである。この講義については過去の私立大学図書館協会からの多くの研修参加者が報告しているとおり<sup>3)</sup>、まずは自分を知り、他者とのコミュニケーションを円滑にするための方策を学ぶものである。4つのタイプとは、Dominance(主導)、Influence(感化)、Steadiness(安定)、Conscientiousness(慎重)に代表されるが、個人がいくつかの要素をあわせ持つ場合もあり、私はCS(慎重と安定)の傾向が強めに出ていたが、研修参加者の多くがこのタイプであったため、少し安心した。DiSC分析ではどのタイプがリーダーに相応しいとか、どのタイプに欠点があるかを定めるものではない。自分がどのようなタイプであっても他者のタイプを知った上で、円滑なコミュニケーションを取ることに工夫を凝らせばリーダーシップを発揮することが可能である、という視点を学ぶことができた。



図8. DiSC アセスメントの1コマ



図9. 研修参加者たちとセンターの前で

他の手法としてSWOT分析や目標設定の手法であるSMARTについての講義もあわせて行われた。この2つの手法も企業や組織でよく使用されるフレームワークであり、一つの手法だけに頼るのではなく、複数のアングルから多面的に分析を行うことでより客観的な結果を得ることができるのだろう。SILLでは図書館に特化したテーマを扱い、リーダーシップの発揮に求められる行動やコミュニケーションをグループワークで定義し、問題の解決策を導くものであった。そして、帰国後に自分の職場でリーダーシップを発揮するためのアクションプランを作成し、そのプランについて個別にセンター長やスタッフと面談する時間もあった。持ち帰った研修の成果をいかに業務や自らのキャリア構築に活かすのかがこれからの課題である。

## (3) 他図書館・他機関への訪問

本研修ではイリノイ大学以外の図書館や他機関へのツアーも用意されており、長距離バスや鉄道などで移動し、宿泊を伴うこともあった。

いくつかの訪問先で Maker Space と呼ばれるものづくりの空間を図書館の新しいサービスとしてみる事ができた。3Dプリンタやレーザーカッター、VRなどが大学図書館や公共図書館で日常的に使用されていることをあらためて知った。帰国後に自分の図書館で Maker Space を設置するための調査をしている参加者も複数おり、関心の高さが伺えた。SFCで展開している Fab Campus、メディアセンターの Fab Space がそれにあたる。私も SFC 勤務時には当時の担当者として取り組んでいたが、日本では、国内の実態を見る限り、図書館のサービスとしてはまだまだ普及していないようである。これにはいろいろな理由が考えられるが、米国では図書館は人が集まって何かするところ、という意識があり、また 3Dプリンタが何かわからなくても一緒にいる人に聞く、わからなくてもチャレンジすることが楽しい、という気持ちが強いのかもしれない。一方日本では図書館は読書するところ、という意識が強く、例えば 3Dプリンタでものづくりというプロトタイプ制作とか実用的かどうかなど、作った後の作品に関心が向いているということではないかと考えている。プロセスか結果か、という問題なのかもしれない。いずれにしても Maker Space が米国の図書館では一定の評価を得ており、実際に利用者が楽しみながら、機材をよく使っていることを肌で感じることができ、とても良い経験であった。



図10. シカゴ公共図書館 Innovation Lab



図11. イリノイ大学イノベーションセンター

研修プログラムでの見学・訪問先は、シカゴ大学(私立)やオハイオ大学(州立)の図書館、世界中の図書館に様々なサービスを提供している機関の OCLC(オハイオ州)、いくつかの公共図書館、美術館に併設されている専門図書館等、表3のとおりである。今回の参加者の多くは大学図書館員であったが、大学図書館以外の機関も数多く訪問する機会があった。これには職域の多様性ととともに、ライブラリアンに共通する姿勢、根底にある職業意識の存在を参加者へ認識させるセンター側の意図があるように思えた。

大学図書館・施設
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 (University of Illinois Urbana-Champaign)
Undergraduate Library
Main Library
Oak Street High Density Storage
Grainger Engineering Library (IDEA Lab)
Center for Innovation in Teaching & Learning
CITL TechHub
オハイオ州立大学 (Ohio State University)
William Oxley Thompson Memorial Library
Research commons

シカゴ大学 (University of Chicago)
The Joe and Rika Mansueto Library
Regenstein Library
<b>州立・公共図書館</b>
アーバナ公共図書館 (The Urbana Free Library)
シカゴ公共図書館 (Chicago Public Library)
ウェスターヴィル公共図書館 (Westerville Public Library)
アーサー公共図書館 (Arthur Public Library)
イリノイ州立図書館 (Illinois State Library)
<b>その他</b>
OCLC (Online Computer Library Center)
プリツカー軍事博物館・図書館 (Pritzker Military Museum and Library)
エイブラハム・リンカーン大統領図書館・博物館 (Abraham Lincoln Presidential Library and Museum)

表3. 見学・訪問先一覧

見学した大学図書館ではシカゴ大のガラスで覆われたドーム型形状の Joe and Rika Mansueto Library が印象的であり、開放的で近未来的な雰囲気であった。350 万冊以上収容できる自動式地下書庫を持ち、巨大なロボットクレーン装置が設置されており、安全のために常にオペレーターが監視しているものの、カウンターでリクエストを入力すると目的の図書を3分ほどで取り出すことができていた。中央図書館である Regenstein Library もあわせて見学したが、こちらは重厚な造りでレガシーな雰囲気の図書館であった。



図12. Joe and Rika Mansueto Library



図13. Regenstein Library

シカゴ大では見学以外にデジタル・スカラシップについての講義も受けた。デジタル・スカラシップとはなかなか捉えがたい概念で、日本ではまだまだ聞き慣れないワードであると思う。デジタル環境下における研究や学習の基盤となるリソースやサービス、インストラクションを利用者のために支援する活動枠組みと理解しているが、シカゴ大では中央図書館内に設置された“Center for Digital Scholarship”という専門部署で対処しており、この取り組みは日本よりも一歩先んじているといえるだろう。

オハイオ大の Thompson Library の建築も新旧織り交ざった調和が印象的であった。ガラス天井とガラス壁、クラシックなインテリアが醸し出す空間は審美的で息を飲むほど美しいものであった。アメリカの図書館建築はどれも素晴らしいものが多く、館内のスペースも合理的な配置となっていた。常に最新の研究動向や利用者のニーズをキャッチアップしてサービスを再構成し続けている限り、大学にとって図書館という施設の位置付けは、今後もその大学の印象を形成する大きな要素であり続けると思う。またオハイオ大でのデジタル環境下における特徴的な図書館のサービスや研究コミュニティサポートは“リサーチ・コモンズ”と

いう名称で展開されており、研究データ利用や学術研究成果の出版についての相談窓口となるなど、大学院生や教職員、ポストドク研究者へのサポートを行っている。



図14. 15. Thompson Library

オハイオではOCLCを見学する機会もあった。OCLCというとWorldcatやWorld Share ILLなどのシステムがすぐに頭に浮かぶが、これまでは遠い存在に感じていた。OCLCの総合目録は世界中の図書館に影響を与え続けており、図書館業務の標準化技術によって世界中の図書館員が繋がっている端的な事例だと考えている。このような業態は他業種ではなかなか見られないのではないだろうか。OCLCプログラムディレクターのNancy Lensenmayer氏が施設内を案内してくれたが、24時間体制で稼働させているサーバ室やその管理の実際を担当の方から説明いただいた。OCLCのような組織を動かすことは私にはとても想像がつかないが、Nancyさんのキャリアは米国図書館員を象徴するかのようであり、このような方によって世界中の図書館業務が支えられていることも知った。パンデミックが落ち着いたら日本に行くつもりだとおっしゃっていたので、またお会いできたらと思う。

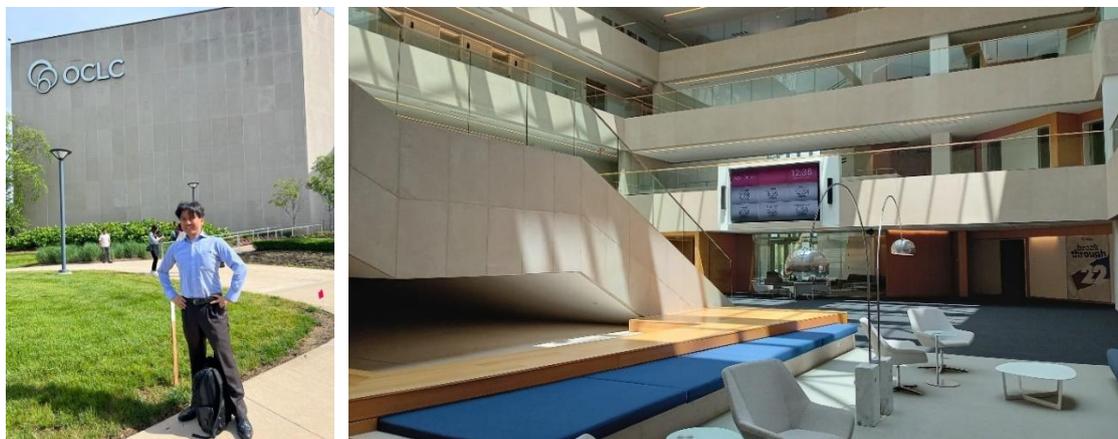


図16. 17. OCLCにて

#### (4) 個別訪問

アカデミックなデジタル環境の下での大学図書館の取り組みや具体的なサービスは従来のテクニカルサービスやレファレンスサービスといった伝統的な枠組みが確立されておらず、それぞれの大学で様々な名称で展開されている。ユーザー志向型のサービスへの変容を現地で実感したが、実際の研究者はどのような捉え方しているのかを知りたいという思いもあり、シカゴでの研修日の夕方以降のオフタイムを利用して、シカゴ大のCS(コンピュータサイエンス)学部に准教授(Assistant Professor)として勤務している友人のラボ<sup>21)</sup>を個人的に訪問し、インタビューを行ったので簡潔に報告しておく。



図18. 19. 中垣拳さんとシカゴ大コンピュータサイエンス学部（ジョン・クレラー図書館棟）

彼は慶應義塾大学の卒業生でもある中垣拳さんであり、2022年1月にシカゴ大に着任している。シカゴ大のCS学部は急成長しており、過去4年で新しく25人の教授を雇用して(元々の20人から45人へ)、急激に拡大している。研究分野も理論系CSに加え、多彩でホットな領域が揃っており、Data Science、AI/ML(Machine Learning)、HCI(ヒューマンコンピュータインタラクション)、Graphics、Robotics などがある(中垣さんはHCIの分野である)。勢いのある若手教員・研究者が集っており、中垣さんの言葉を借りるなら、「世界でも稀なエネルギーとポテンシャルに満ち溢れた急成長中のコミュニティの一員として、自分が情熱を注いできた研究・教育に携われる場」とのことである。CS学部はジョン・クレラー図書館の建物内にあり、CS学部の発展とともに館内の書架エリアをCS学部のラボやディスカッションエリア等へ次々と改装を行っている。おかげでジョン・クレラー図書館のエリアとしては集密書架と講義室がメインのこぢんまりとした空間だけになってしまっているが、これも時代の流れだろうか。

中垣さんは私がSFCのメディアセンターで勤務していた頃、コンサルタントと呼ばれる学生スタッフの一人であった。10年以上も前のことである。その後の中垣さんのプロフィールはシカゴ大のCS学部のウェブサイトに掲載されているとおりである<sup>22)</sup>。経歴も素晴らしいが、コンサルタントを卒業してからも、たまにメディアセンターの事務室に顔を出してくれるような気さくな性格で、連絡はSNSでとれる状態であった。シカゴ大の教員になってからも慶應義塾大学の学生向けに夏期の研究留学プログラムを画策しているそうで、そのような後輩の面倒見の良い人柄でもある。彼のラボでは所属の院生が忙しく研究や実験に関連する作業をしており、新しい知見やイノベーションはこのような現場から生まれるのかもしれないと、胸が高鳴る思いであった。ラボ見学時のインタビューについては下記のとおりである(表4)。

Q 1) 現在の研究内容や関心事を教えてください。その研究にフォーカスする動機は何でしょうか。
A 1) ヒューマンコンピュータインタラクション(HCI)、メディアデザインに関心を持っている。デバイスのインターフェース(キーボード、スクリーン、スマホ)改善、ウェアラブル技術に取り組んでおり、AxLab(Actuated Experience Lab)という名称でラボを運営している。フィジカルアウトプットを重視しており、人に行動を促すというラボのコンセプトを掲げている。
Q 2) 研究活動を行う上で大学に必要なもの、大学がサポートすべきものは何でしょうか。
A 2) シカゴ大CS学部は風通しがよく、MIT気質もあり、アカデミックさを重視した環境である。研究活動への特別な資金は必要。スペース、建物の整備も重要。具体的には奨学金、マイノリティー基金、寄付行為、ギビングディ(寄付呼びかけ)などを支援して欲しい。
Q 3) 大学の事務局とのやりとりについて、申請や手続きなどは合理化・システム化されていると感じますか。

A 3) ラボの運営は小さい企業を回しているみたいなもの。Ph.Dの雇用は自分でやる。スポンサーとのパートナーシップやNSF(米国国立科学財団)から研究費をとっている。すべてオンラインで手続き可能。シカゴ大発行のクレジットカードを持っている。
Q 4) シカゴ大の図書館、図書館のサービスを使っていますか。使っているとしたら、どのように利用しているのかを教えてください。
A 4) 着任間もないこともあり、これまで特に利用していない。実際の研究における情報入手はカンファレンスペーパーが中心。購読は大学(図書館)にしてもらっている。IEEEのジャーナルはよく利用する。図書館のスペースはほとんど使用せず、基本的にラボで過ごしている。
Q 5) 論文投稿にオープンアクセス誌を検討したことはありますか。オープンアクセス誌に対する大学や図書館の費用サポートについてどのように考えていますか。
A 5) 論文執筆はOverleaf / Latexフォーマットで作成している。オープンアクセス誌に投稿したことはある。論文はACMにアプライすることが多いが、費用負担を感じているため、制度が使いやすければ使いたい。ただ、研究者としては旅費、出張滞在費の方を援助して欲しい。
Q 6) 論文作成の頻度やそれに費やす時間、資料の集め方について教えてください。
A 6) 年間5本も発表すれば良い方。論文だけでなく、研究内容紹介ビデオ映像、作品そのものの製作、オープンソースになっているものも使用する。
Q 7) シカゴ大の図書館員・図書館サービスについて感じていること、期待することを教えてください。
A 7) シカゴ大の図書館員と対応することはなく、学部のスタッフ、教員の対応がメイン。日本の教員の方が事務仕事の量が多いかもしれない。電子資料の閲覧は図書館のものをこれまでも無意識に使っていた。

表4. シカゴ大学 中垣拳さんへのインタビュー

## (5) 現地での交流

研修期間中、参加者にはそれぞれ1名のライブラリーバディと呼ばれる、イリノイ大学図書館の担当者1名が付き、ささいな相談などを受けるメンター的な役割をしてくれる。私のバディは、日本の図書館事情を研究しており、日本のいくつかの大学で研究員としての勤務経験もあるSteven Witt氏だった。週末にはドライブで近隣の田舎町や公園に連れ出してくれ、おかげで研修の合間に一息つけるような時間を過ごすことができた。



図20. ライブラリーバディのSteven Witt氏



図21. ナイトミュージックライブ会場にて

最初の週末にはBarbara Ford氏の自宅でウェルカムパーティーが開催され、センターの全スタッフとライブラリーバディー一同が研修参加者を歓迎してくれた。慣れない土地で過ごす参加者を気遣っていたと思うが、週末にはアーバナ市のファーマーズマーケットに連れ出してくれたり、シャンペーン市のナイトミュージックライブを共に楽しんだりもした。全ての出来事はとても書ききれないがアメリカ人の文化・余暇の過ごし方を紹介してくれているようでもあった。この地域の人種は様々であったが、人々はとてもフレンドリ

一で平和に過ごしており、多様性を受け入れることを具現化したような街であった。

また前述したリーダーシップ研修でのグループワークショップに加えて、Chai Wai Presentation と称して、参加者が自分で発表テーマを決めて、全員の前で最終発表をする機会もあった。Chai Wai とはざっくりとばらんにトークを共有するという意味で、発表者と聴衆側とのコミュニケーションを促すものである。私は南アフリカの高等学校の図書館員である Vuyokazi Jamieson 氏と共同で発表を行ったが、南アフリカで勤務し、館種も異なる外国人の図書館員と寮内の食堂で夜遅くまで討議し、発表内容を擦り合わせ、英語のスピーチを互いにリハーサルしてチェックを行った。この際、親切にも Amani Ayad 氏が立ち会ってくれたのだが、これも貴重な経験であった。



図 2 2. Urbana Farmers Market にて



図 2 3. Chai Wai Presentation 後の修了式

## 6. おわりに

本研修は図書館業務の特定のテーマに焦点をあてるものでなく、内容の深さというよりは広さ、フラットな視点を重視した構成であった。短期間に講義で多くの情報を知り、北米の大学図書館事情を学び、センターのスタッフ、プレゼンター、訪問先での米国のライブラリアン、各国からの参加者らと交流ができた。研修の実際の様子は参加者が自らの学びや気づき、経験をセンターが思慮深くも Web サイト上に用意したブログ<sup>23)</sup>に残されているため、こちらも参照いただきたい。イリノイの地での経験は、細分化した日常業務から離れて自分の勤務先の図書館と業務を俯瞰し、その目的やあり方を考える契機となった。大学図書館が直面している問題状況は、すでにグローバルなものであり、日本も北米の事情とさほど変わらず、むしろほとんど同じ状況であることも知った。

滞在中はプログラム以外の日常生活、新型コロナ対策、新型コロナウイルス PCR・抗原検査会場の選定、帰りの航空便のことまでセンターのスタッフが気を配ってくれたおかげで、安心して一か月間を過ごすことができた。モーテンソン夫妻の寄付によってセンターが設立され、その資金により国際的な研修プログラムが継続運営されていること、私を含めた世界中の多くの参加者に恩恵を与え続けていることに畏敬の念を感じずにはいられない。加えて、センターは海外からの研修参加者に研修の機会を与える活動だけでなく、平和のための図書館(L4P)イニシアチブという、国際的に平和を前進させるために世界中の図書館の役割を促進する活動も行っている。このことをよく表現している、C. Walter Mortenson が確信していた次の短い言葉がある。“Librarians sharing information is one of the shortest and surest roads to world peace. (図書館員が情報をシェアすることは、世界平和への最短で確実な道である)<sup>24)</sup>”。世界情勢が混迷する時代の中で、図書館員の仕事をあらためて見つめ直すことができた。センターの方々への感謝とともに、寄付を活用して事業を成す米国社会の一面を知った。センターと毎年開催について確認いただき、参加する権利を引き延ばして研修機会を与えてくれた私立大学図書館協会と、私を快く研修へと送り出してくれた慶應義塾大学の諸兄に心より感謝を申し上げたい。

## 注・参考文献

- 1) この時点では日本から米国へのフライトには搭乗1日前の新型コロナウイルス検査での陰性証明書(英文)が必要であった。米国から日本へのフライトについては出国前72時間以内の陰性証明書が必要となっていた。
- 2) Illinois library - Mortenson Center for International Library Programs, <https://www.library.illinois.edu/mortenson/>, (accessed 2022-08-27)
- 3) 私立大学図書館協会 : 国際図書館協力委員会 - 海外研修, <https://www.jaspul.org/ind/committee/kokusai/kaigaikensyu.html>, (accessed 2022-08-27)
- 4) Mortenson Center for International Library Programs: Mission, <https://www.library.illinois.edu/mortenson/about/>, (accessed 2022-08-27)
- 5) Division of Management Information - UIUC Student Enrollment, <https://dmi.illinois.edu/stuenr/index.htm>, (accessed 2022-08-27)
- 6) Division of Management Information - UIUC Campus Profile - Campus Total <https://dmi.illinois.edu/cp/default.aspx>, (accessed 2022-08-27)
- 7) Best Library and Information Studies Programs Ranked in 2021, U.S. News and World Report, <https://www.usnews.com/best-graduate-schools/top-library-information-science-programs/library-information-science-rankings>, (accessed 2022-08-27)
- 8) School of Information Sciences, University of Illinois Urbana-Champaign, <https://ischool.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27)
- 9) eText : Center for Innovation in Teaching & Learning, <https://etext.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27)
- 10) Center for Innovation in Teaching & Learning(CITL), <https://citl.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27)
- 11) Measuring Price Change in the CPI: College tuition and fixed fees, U.S. BUREAU OF LABOR STATISTICS, <https://www.bls.gov/cpi/factsheets/college-tuition.htm>, (accessed 2022-08-27)
- 12) EASYsearch, <https://www.library.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27)
- 13) BIG 10 Academic Alliance, <https://btaa.org/>, (accessed 2022-08-27)
- 14) CARLI (Consortium of Academic and Research Libraries in Illinois), <https://www.carli.illinois.edu/>, (access 2022-08-27)
- 15) 早稲田大学図書館との図書館システム共同運用, 慶應義塾大学メディアセンター, <https://www.lib.keio.ac.jp/about/activities.html>, (access 2022-08-27)
- 16) Illinois Data Bank, University of Illinois Library Research Data Service, <https://databank.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27)
- 17) Fab Campus, 慶應義塾大学 SFC ファブキャンパス, <https://fabcampus.sfc.keio.ac.jp/>, (access 2022-08-27)
- 18) 慶應義塾大学が米国大学図書館によるデジタルライブラリーHathiTrustへ加盟, 慶應義塾大学, <https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/files/2022/6/9/220609-1.pdf>, (access 2022-08-27)
- 19) DiSCについては下記コンサルティング会社による講義であった。Learning Alliances Company, <https://learning-alliances.com/>, (accessed 2022-08-27)
- 20) SILL : Strengthening Innovative Library Leaders, <https://www.library.illinois.edu/mortenson->

leadership/, (accessed 2022-08-27)

- 21) AxLab Actuated Experience Lab, <https://www.axlab.cs.uchicago.edu/>, (access 2022-08-27)
- 22) Ken Nakagaki, Department of Computer Science - The University of Chicago, <https://cs.uchicago.edu/people/ken-nakagaki/>, (access 2022-08-27)
- 23) The Mortenson Center Associates Program: Associates Blog Pages, <https://mortensonassociatesprogram.wordpress.com/>, (accessed 2022-08-27)
- 24) “Promoting International Education, Understanding, and Peace” . International Leads. 2022, vol.36, no.2, p15, <https://www.ala.org/rt/sites/ala.org.rt/files/content/intlleads/leadsarchive/202206.pdf>, (accessed 2022-10-02)